

趣味の選択の一形態

—幼少期におけるピアノレッスンの導入スタイル—

神 澤 志 摩

1. 趣味とピアノ

趣味はいかにして選択されるかという問題を考えるために、はじめに趣味という言葉自体に注目してみたい。趣味とは英語の taste の訳語である。テイスト=味覚という語は、ヨーロッパにおいては17世紀から食文化の議論と不可避的にかかわっており、必要 need と楽しみ pleasure という語と共に論じられ、社会的な卓越化を作り出すための観念的手段であった〔グラナウ、1997〕。日本では、神野によると、明治40年頃に、自然主義を代表とする文芸活動に伴ってテイスト=趣味の訳語が一般的になり、「その人がどんな趣味をもっているかが、その人を表す指標であるため、趣味は都市で暮らす人々、とりわけ上昇志向の強い新中間層にとって、重要なコミュニケーションの手段となった」〔神野、1994〕。

趣味という概念は、近年ではファッションの流行やライフスタイルの分野において、食べ方から買い物場所、服装、振る舞い、建築、室内装飾の好みに至るまでの美的あるいは道徳的基準として考えられている。たとえば、ラインズは、テイストメイカーと呼ばれるような、趣味やライフスタイルを決定する人々に注目することによって、19世紀半ばから20世紀のアメリカの趣味の流れを段階的に説明した〔ラインズ、1980〕。

また、ブルデューは、趣味を顕在化した選好と考え、弁別的な生活様式をもたらす根本として位置づけた。趣味は、ハビトゥスに基づいて物や人を類似させる作用をもつことから、ブルデューは、職業集団を配した社会的位置空間に、趣味あるいはライフスタイルによって描かれた生活様式空間を重ね合わせ、1960年代と70年代前半のフランスのある社会

集団に共通した趣味を視覚化した。そしてブルデューは、趣味を、必要性に距離をおき、ゆとりから可能となる「贅沢趣味」と、選択の余地のない実質的な「必要趣味」とに分類した。どちらの趣味にしろ、趣味は「配分上実際に自分に与えられ、分類上自分に割り当てられている所有物を好きになる」ことをもたらし、運命的に定められているものである〔ブルデュー、1990〕。

この趣味の分類のうち、前者は理解しやすい趣味である。趣味がなんであるかを問われた時に人々が答えるのは前者の趣味であるが、もし答えられないとしても、その人は後者の趣味をもっていると言える。つまりこれは、いくつかの商品からひとつを選ぶ時の、扱いやすいから、丈夫だから、経済的だから、目の前にそれしかなかったから、などという指向を示すものである。趣味＝テイストであるなら、後者の趣味も考えられる。しかし趣味がなんであるかを問われた時、日本では、趣味≡ホビーあるいはスポーツ、文化活動であることが条件付けられ、返答につまる、または無趣味に陥る人々がいる。趣味は旅行です、と答える人はいても、旅行にける費用よりも食費を優先させることが趣味です、という言い方は日本ではしない。そのような人は、食べ歩きが趣味である人ともまた違うのだ。このように、日本においては趣味＝テイスト以外の明確な趣味の概念が必要となる。

この論文では、以下に趣味の定義を定め、それに従って議論を進めた。つまり、趣味とは、きっかけはどうかであれ、現時点では実生活上の必然性と有用性に一定の距離を置き、ある種の意図を含み、他者の評価の域を越える、個人の性向に基づいた物品または知識の蒐集や活動のスタイル及び技能が身体化したものである。

具体的には趣味という語には次の3つの含意がある。

- ①性向：「好み」と呼ばれるような美的・道徳的規準。「趣味がよい・悪い」、「中国趣味」などといった使われ方をする。
- ②物品または知識の蒐集や鑑賞行動：野球カード集め、読書、映画鑑賞など。
- ③技能：絵を描くこと、釣り、英会話など。

この3つのポイントはどれも同じフェーズに並ぶものではない。①は全ての根本に位置するもので、テイストである。そして②はその上に、③はさらにその上に位置づけられている。①のみを趣味と指すことでは

きるが、②を趣味と呼ぶ際は①が、③を趣味と言う時は①と②が含まれており、②と③は①を具体化したものと考えられる。②と③の間には①と②の間ほどの差はない。つまり②と③は可視あるいは可聴であり、①だけが観念の問題で、②や③の選好の基準である。②があるからといって③があるとは限らないが、②と③は不可逆で、②は③に先行するものであり、③は訓練の結果である。たとえば、ピアノを弾く者は、ピアノに関するなんらの知識なしにピアノを弾く趣味を持つことはできない。どの鍵盤が「ド」であるのかという知識や、楽譜を読むという能力、リサイタルを聴きに行くという活動が含まれるかもしれないし、ピアノを弾くこと自体がその個人の性向の顕在化した文化である。

これらの趣味と言えるものに付帯する条件は、(a)実生活上の必然性と有用性から解放され、したがって基本的な生活を脅かすことのないこと、(b)それが偶然の積み重ねで起こっているのではなく自覚的に行われていること、(c)相対的に絶対的な私的判断であること、(d)それが身に付いた慣習行動となっていることである。たとえば切手の蒐集は、それを金銭として扱う時、商売道具として仕入れる時には趣味とは言わない。そしてそれは誰がなんと言おうとその個人がいいと言えればいいものであり、また決して一回的なものであってはならない。切手を1枚持っているからといって、趣味が切手の蒐集だとは言えないのである。

ここで、本稿のトピックである趣味としてのピアノとは、趣味以外でピアノに接することとどう違うのかをより明確にしなくてはならない。それは、専門技術的理解をもたずにピアノを弾くあるいは聴くことを指す。このようにピアノに接する人々は、音楽の感情的浄化や感情的暗示などの感情的効果を求めているのであって、本人の認識いかんを問わず、芸術作品としてピアノ作品を意識しているのではない。アドルノは「芸術作品として音楽美を鑑賞するためには、プロの音楽家以外になし得ぬようなレベルを必要条件とする」と述べている〔アドルノ、1970〕。趣味としてピアノ作品に接するような人々にとって、それらの作品はすでに芸術作品ではない。したがって、音楽演奏あるいは鑑賞において感情的効果を求めるということならば、ジャズやポップスのメロディーやラップやロックの歌詞に感情的効果を求める人々と変わらない。つまり、ピアノ作品としてのクラシック音楽にそれらを求める人々との相違はジャンルの相違だけにほかならない。そして他のジャンルとクラシッ

ク音楽の間に引かれた最も特徴的な境界は、その演奏家を芸術家として認められるかどうかの区別である。プロの演奏家の目的が芸術であるか商業であるかの区別において、クラシック音楽は、唯一正統的な芸術と苦なく認められるジャンルなのである。

様々なジャンルの音楽を選択できる社会において、クラシック音楽を最も正統的なジャンルであると説明なしに明言するのは危険である。では、クラシック音楽が最も正統的なジャンルだと思われる理由はどこにあるのだろうか。単純に、その歴史が他のジャンルに比べて長いというもの、他のジャンルから際立っている特徴である。また、ブルデューは「正統とみなされ価値づけられる文化は必要性の距離により決定される」と述べている〔ブルデュー、1990〕。正統的な文化への正統的な関わりとは、無償で自己投資を行う美的性向によって可能となる。ブルデューによると、絵画や音楽は最も正統的な分野であり、正統的な芸術作品ほど分類、等級づけ作用が強くなっていく。音楽の中でもクラシックは正統的で軽音楽は非正統的といったジャンルによる分類ができ、さらに、クラシックの中でもバッハは正統的でヨハン・シュトラウスは非正統的というようにジャンル内での差別化がある。そして、ブルデューの考え方によると、この文化的正統性の一致が社会にほぼ共有されるのは、バッハの作品に、より高度な芸術的価値が内在するからというよりも、バッハの作品を芸術作品として評価することのできる受容者が出現し、歴史的経過の結果として形成された音楽場の構造が、芸術家とその受容者のもつ美的性向の体系と現在たまたま一致するからなのである〔ブルデュー、1995〕。

趣味でピアノを弾くあるいは聴く人々と、バッハの作品を芸術作品として評価することのできる受容者が一致するとは限らない。彼らの多くは、おそらくバッハの作品を芸術作品というよりも、ほかのジャンルの音楽と同様のものとして聴いているであろうし、仮に芸術作品と認識したところで、それを芸術作品として受容する能力を持っていないであろうからである。その時バッハの作品は、クラシック音楽ではなく、イージーリスニング系ポピュラーミュージックに限りなく近くなる。小川は「クラシック音楽は相対化されその権威は次第に崩れつつある」と述べている〔小川、1993〕。小川は、今やクラシック音楽は他のジャンルの音楽とラインを画するものではなく、ポップスやロックと併用され、CD

の普及やCMへの起用によって日常的に触れられるものとなったと分析している。しかし選択肢として他のジャンルと並んだと言うことはできても、現在の音楽場が、クラシック音楽の正統性（権威）は失われたとみなしていると言うことは妥当ではないだろう。他の様々なジャンルの中からクラシック音楽を選択する者にとって、実際イーージーリスニング系ポピュラーミュージックとして聴いているにしても、クラシック音楽は未だ正統性のあるものなのかもしれない。

2. 良家の女子のたしなみとしてのピアノ

猫も杓子とも言えるほど、誰もがそれに手を染めていると思えるような状況があったとしたら、それは1970年代前半の子供のお稽古におけるピアノのレッスンにはかならない。ピアノのレッスンは、主にクラシック音楽と呼ばれる一群のピアノ音楽作品を練習し、向上に努める習い事の場であり、ピアノの持つ性格上、最もよく習われてきたクラシック音楽のお稽古事のひとつである。たとえば、1954年に開設したヤマハの「幼児のための実験教室」は150人で始まり、1959年に「ヤマハ音楽教室」と改称した時の生徒数は2万人、1970年に30万人を突破した。ピアノの生産台数も、1950年には500台だったものが、1960年には4万6千台で、1970年には世界一の27万3千台に膨れ上がった¹⁾。

1960年代末から1970年代初めの生まれの人々というのは、このピアノ学習人口が爆発的に伸びた時代に幼少期を迎えた人々である。それは経済の高度成長期とも一致する。1989年から1990年に行われた「現代の若者と音楽」調査（研究代表、稲増龍夫）では、その当時大学生の年齢に達している、1960年代末から1970年代初めの生まれの人々のうち、女子の86%、男子の27%がピアノのレッスンを経験していることがわかる。このうち、女子のレッスン体験者数が男子の3倍に近いことから、ピアノのレッスンは子供の情操教育に役立つという考えや、それが子供に習得させたいと親が望む技能であるという考えよりも、ピアノをそつなく弾きこなせることが女性には好ましいという考えが優っていると言うことができるのではないだろうか。つまりピアノには女性のたしなみとしてのポジションがある。

ピアノは、シーボルトが日本に持ち込んだという例を別にして²⁾、明

治以降に日本に輸入されるようになった西洋楽器である。1900年には山葉寅楠³⁾の手によって、国産のピアノが製造された。ヨーロッパでは、ウェーバーによると、ピアノに先行するクラヴィア（鍵盤楽器の総称）に特有の公衆は、家に縛りつけられている人々の層であり、それは中世では修道僧、近代では貴婦人たちであったという〔ウェーバー、1954〕。西原は「ピアノ音楽は、近代的な流通経済に最もファッションブルなかたちで乗った最初の重要な商品であった」と述べている〔西原、1995〕。つまり、ピアノは18世紀前半にそれ以前のクラヴィアから改良され、18世紀後半に、市民社会が興隆しブルジョア層が貴族的あるいは上流社会的なものを望むようになったのをきっかけに、貴婦人たちからトリクルダウンして、良家の女子のたしなみのシンボルとして庶民の間にやってきたという性格を持つ楽器なのである。そのシンボルがゆえに、良家の、あるいは良家を夢見る家庭の一部屋を飾る家具としてのピアノの役割は、いくつかの著作に指摘されている〔たとえばウェーバー、1954、西原、1995、アドルノ、1998〕。

欧米に対する憧れの強かった日本の上流階級では、大正期になるとヨーロッパが経験したピアノ文化を同じように受け入れたが、日本におけるピアノの普及には、それと似た価値のものがすでに良家の女子のたしなみとして一般的であり、ピアノはその西洋的なものとして、西洋志向の強い日本社会でそれにとって代わっただけなのではないだろうか。その楽器とは琴である⁴⁾。そしてピアノの和名は洋琴という。

日本にもこのように、良家の女子のたしなみとして、ちょっとした音楽の素養を求める土壌があったからこそ、ピアノはその後の経済成長に伴い良家を夢見る庶民たちに普及していったのだろう。加えて、宮島は「日本の近代教育は西欧の音楽、美術などをその主要カリキュラムの中に導入した。いったん学校文化の中に位置を占めるようになると、それは正統的文化としての威信を獲得する」と、ピアノの普及における学校教育の重要性を述べている〔宮島、1994〕。

ピアノの普及を支えた第三番目の理由として、ヤマハ音楽教室やカワイ音楽教室に代表される企業の教室商法がある。これは日本のピアノ販売を促進し需要を掘り起こすのに大役を担った。クラシック音楽が、その他のジャンルと並ぶことにおいても大役を担ったと言えるであろう。そこではピアノと共にエレクトーンが置かれ、アコースティックな音と

機械音が目に見えて同居している。西山は「所詮玩具にすぎない電子オルガンのたぐいをピアノと同様に子供の情操教育上最適の芸術楽器と公言して憚らない」と音楽教室を批判している〔カヴァイエ・西山, 1987〕が、現在ヤマハ音楽教室には75万人の生徒が通い、国内だけでもその会場数は1万3千になり、すでに400万人の卒業生がいる。ヤマハ音楽教室と個人ピアノ教室とが異なる顕著な点は、そのグレードテストと呼ばれる音楽能力検定制度にある。それは鍵盤初期学習者のためのグレードから演奏家を目指すためのグレードまで12段階に分かれており、海外のヤマハ教室でも実施されているという。

3. ピアノレッスンの3つの導入スタイル

戦後日本のピアノの生産台数⁵⁾は、1965年から1980年までの15年間で飛躍的に伸びている。日本楽器製造株式会社（現ヤマハ株式会社）が1965年頃に売り出した普及版のアップライトピアノの値段は19万円前後で、1980年頃は35万円前後であった。都市勤労者世帯の1ヵ月平均の収入は、1965年には6万8,419円、1980年では35万0,822円であり、この期間にピアノの価格が彼らに近づいてきたことを示している。また、前述のように、「ヤマハ音楽教室」の生徒数の増加や高度経済成長期とも重なり、この期間のピアノレッスンは、これ以前とこれ以後とは明確に区別できるものと思われる。これ以前とは、まだ明らかにピアノが高嶺の花であった時期であり、これ以後とは、ピアノの普及がある程度に達し、その特化された性格も薄くなった時期ということになる。

下記の人々は、1960年代末から1970年代初めの生まれ（1998年現在20代後半から30代前半の人々）で、1970年代にピアノのレッスンを実際に受けた人々である（全て仮名）。この時期にピアノレッスンを受けていた人々の中にも、現在は趣味である人々、つまり専門技術的理解能力をもたず、ピアノに感情的効果を求めているピアノ愛好家あるいは過去に愛好家であった人々と、専門技術的教育を受け⁶⁾、中にはその後、音楽で生業を立てている人々の2通りに分かれているので、前者をAグループ、後者をBグループとした（（ ）内は職業）。⁷⁾

A・浅井美代

B・池内恵理（ピアニスト）

・秋山真紀

・岩下早苗（ピアノ教師）

- 阿部和子
- 青木洋子
- 安達良江
- 相原治子

- 飯島智美 (ピアニスト)
- 伊藤恵子 (音楽科教諭)
- 石野玲子 (オペラ歌手)
- 井上静香 (ピアノ教師)

彼女たちに対し、1996年から1997年にかけて、ピアノのレッスンや練習の様子、その頃の生活スタイル、家族の様子、現在のピアノとの関係などについて、時間の経過を軸にして、インフォームドコンセント⁸⁾の後、1時間から2時間にわたって非構造的なインタビューを行った。上記の人々は2歳から9歳(1970年~1977年)の間にピアノのレッスンを始めており、ピアノレッスン歴⁹⁾は4年から27年の範囲に広がっている。

当然のことながら上記の人々のうち、操作的に選んだ年代コーホート外に、全ての状況において同じようなケースと言えるインタビューーたちはいない。しかしいくつかの部分において類似したケースが見られ、その中のいくつかはAグループの人々に顕著で、いくつかはBグループの人々に顕著であった。そしてまた、AとBの区別なしに顕著に見られた相違と類似は、ピアノのレッスンを受けるようになったきっかけであった。ピアノのレッスンを、判断力に責任を持った大人が受けるというならまだしも、2歳から9歳ほどの幼児及び児童がそれを受けるといった場合、その導入部には本人の選択という以外にもいくつかの可能性がある。そしてこれは、趣味の選択への入り口とも言える選択である。趣味の選択の根本が性向によっている以上、幼少期のピアノレッスンの経験は、間接的に、将来、つまり現在の趣味の潜在性をはらんでいる。

インタビューの結果、上記の人々の場合には、典型的に次の3つの導入スタイルが考えられた。

- **自発関心型**：周りの者がやっているのを見て習い始めた。
- **兄弟先行型**：兄弟が習っていた、あるいは習い始めるので習い始めた。
- **両親主動型**：両親の意図で習い始めた。

自発関心型の場合は、幼児および児童なりにも本人のかなりの自由意志がないとも言えない。しかしそれが認められるか否かは両親の意志に負っており、以降のピアノレッスンは長く続くかどうか、本人が練習に熱心かどうかに対し、導入期当時の本人の自発的な意志が、強い弱い、あるかないかが積極的に左右するわけではない。ここで肝心なこと

は、両親や兄弟の影響外で自ら進んでピアノに関心を持ったということである。

兄弟先行型の場合、上記の人々の中でそれに当てはまる全てのケースでは、姉が彼女たちに影響を与えている。したがって世の中の全ての兄弟先行型のケースが姉の影響を指すというわけではないが、前述の「現代の若者と音楽」調査において示した数字から見られるように、女子のピアノレッスン経験者が男子の数をはるかに上回ることから、兄弟の中でも女性の兄弟に影響されることが多いと考えられるのではないだろうか。また、女性の兄弟のうちでも、年齢的に上の者の体験がより早く、下の者がその影響を受けると考えることもできるが、自発関心型のあるケースにおいて、本人の希望が叶い、そのついでに姉もレッスンを受けるようになったというインタビューもいた。どちらにしろ、兄弟先行型の場合も自発関心型と同様に、両親の意志が最終的な判断を下すことは言うまでもない。

したがって両親主動型の場合は、他の2つのカテゴリーに比べ、両親の意図が最も強いケースである。つまりそういった両親というのは、本人の希望も聞く前からピアノ教室に彼女を連れて行ったり、彼女が生まれる前から子供にピアノを習わせようと思っていたりする。しかし過去についてのインタビューであるので、本人が自ら希望したことを忘れていて、両親のせいにしてしまっているということもあり得る。けれど全てのケースにおいて言えることは、両親、特に母親のスタンスが彼女たちのピアノのレッスンに、その導入部でも発展部でも、多大な影響を与えていることである。今回は、ピアノのレッスン導入部における3つの類型について、ケースを見ていくことにする¹⁰⁾。

3-1 自発関心型

安達良江 A

きっかけは、小学校2年生の時に、友達が弾いているのを見て、習いたくて習いたくて親に頼んだ。クラスにピアノを習っている友達は数多かった。男子はわかんないけど、クラスに女子は20人いて、半分以上はピアノをやったよ。もうほとんどピアノは当たり前みたいな感じで、やってる子は多かったと思うよ。特に仲の良かったお友達がやっぱり習ってて。その子とかが学校のピアノでね、こういうのを覚えたって弾くじゃない。それを羨ましく聴きながら、その時それを覚

えて。それで家のオルガンで、私もやりたいなやりたいなっていう感じで、なんか適当に弾いて。そのオルガンは、お姉ちゃんが昔習ってたから家にあったの。
〈略〉 そんな風に1年ぐらいためてたのが、やっと親に聞き入れてもらったって感じ。それで同時にお姉ちゃんと習いだした。

この部分で述べられているのは、安達良江の小学校ではクラスの女子の何人かが彼女よりも先にピアノを習っており、彼女はそれを羨ましく思っていたこと、それが1年かかって両親に認められたこと、であり、彼女自身はしたがって自発関心型である。また、彼女の姉も同時にピアノレッスンを始めたこと、姉はそれ以前にオルガンを習っていたこと、も述べられている。彼女の姉は兄弟先行型で、それも妹からの影響である。彼女には兄もいるが、兄はピアノもオルガンも習っていない。ちなみにオルガンは、主に小、中学校の音楽の授業用に、1968年には55万台のリードオルガン（足踏みによる風力で音を出すオルガン）が製造され、これは世界一の生産量だったという〔赤井、1995〕。彼女の姉はちょうどその頃にオルガンを習っていたことになる。

相原治子 A

黒くて光ってて、あれがすごい好きだったんですよ。初めて見たのはいつだろう。それは覚えていないんですけど、すごいきれいで、それでやりたいなと思ったのは覚えています。保育園にピアノがあって、すごいきれいだっただ。〈略〉 親も、別にうちは強制的に習わせるっていうんじゃないで、そういう習い事っていう感覚ってなくて。で、小学校とかに行くと、みんな算盤を習ったり塾に行ったりとかやってますよね。ピアノをやったり習字をやったりしている人も周りにいました。それでなんか、ああ習えるのねって思って、で、習いたいんだけど親に言った記憶はあるんですよ。両親はやりたいんだっただらやりなさいって。〈略〉 その時に妹も始めたんです。なんか母親が、お姉ちゃんが習いに行くって言うけど、あなたも行くって言ったら、なんかうんって言ったらしく、そういう感じで。

相原治子が述べているのは、ピアノのフォルムがきれいであることが弾きたいと思ったきっかけであったが、習い事をするような家風ではなかったもので、小学校に入ってから友達の様子を見て両親に習いたいと言

ったということであり、彼女はお稽古事としてピアノを習えるのだという状況を知り、自らレッスンを望んだ自発関心型である。また、妹も同時に始めたことも述べられており、彼女の妹は兄弟先行型である。彼女の妹はのちに音楽大学に進学し、現在はピアノ教師として自宅でピアノを教えている。彼女には弟もおり、弟は「メチャメチャなことを弾いて、それがなんか楽しかったらしく」、彼女たちの「母親が習いたいのって言ったら、うーん、ちょっと行こうかなとか、気軽な感じで」小学校低学年でレッスンを始めたという兄弟先行型で、中学入学前にやめている。

池内恵理 B

家にアップライトがあって、それは姉のだったの。姉はけっこう13とか4とか歳が違うのね。姉がヴァイオリンをやったりピアノをやったりしてたのは、私は全然知らないのね。〈略〉周りの子がピアノをやり始めた時に、私もやりたいて言ったらしいの。それは私は憶えてないのね。母が最初に連れてったのが幼稚園の先生だってことは、たぶん幼稚園の先生にみんな習ってて、幼稚園が終わったら、ピアノやる人は残ってなさーいとかいう感じで、それで私もピアノやりたいて言っただけじゃないかと思うんだけど。母親はなんか、私がピアノやりたいて言うのを待ってたらしいのね。

ここでは、歳の離れた姉が使っていたピアノが家にあったこと、幼稚園の友達がピアノを習い始めるのを見て自分も習いたいて言っただけで、母親もそれを望んでいたこと、が述べられている。母親が望んでいたことを知ってか知らずか、池内恵理は自らピアノに関心を持った自発関心型であり、ピアノを習っていた姉がいるにもかかわらず、その年齢差から姉の影響外にあったようである。ただ、彼女は自身が望んだことについて「私は憶えてない」とも言っている。しかし後の部分で「母親が横に座って、ピアノの時間ですよって言って2時間ピアノを弾いて。それはすごい苦労だったって母親は言ってたのね」というように、母親が過去について話してくれたことに何度かふれている。この部分もそのように、回想的に母親から聞いたことではないかと推測できる。

岩下早苗 B

横浜の祖母のうちに私と同一歳ぐらいの従兄弟がいて、ピアノをやってたのよ。それがすごく羨ましくて。そのピアノがすごく憧れで、ピアノ弾きたいピアノ弾きたいって言って。今でも忘れられないんだけど、横浜に何回か遊びに行っ
て、大阪に帰ってきて、うちを開けたらピアノがあったの。すごく嬉しかったの。〈略〉茶色いマホガニーのピアノで、横浜の従兄弟が持つてるピアノとおんなじだったのね。友達とかでも黒いピアノで弾いている子もいたけど、でも私が一番最初にピアノやりたいって言ったきっかけが従兄弟でしょ。だからその従兄弟が使ってるおんなじピアノを使えるっていうのがすごく嬉しかった。

これは岩下早苗が大阪に住んでいた4歳の頃の話であるが、彼女は従兄弟がピアノを習っているのを見て憧れたという自発関心型である。他の自発関心型のケースと異なるのは、それが女友達ではなく、男の従兄弟からの影響であることである。また、彼女の母親の実家にはもともとピアノがあり、それは、「伯父がすごくクラシックが好きで、その伯父のために祖母が買ったんだと思うの。日本にはなかった時代、ドイツから輸入して」という音楽的に寛容な家庭である。彼女には弟がおり、「小学校1年ぐらいから始めたんだ。お姉ちゃんがやってるからやるって聞いたら、やろうかなって、たぶん気楽にやったんだと思うのね」という兄弟先行型で、彼は現在音楽事務所に勤務している。

井上静香 B

きっかけは、うちの母が新聞広告でヤマハ音楽教室のチラシを見て、体験入学とかがあって、それで行ったの。4歳にもうなってたかな。もとは、幼稚園でほかにピアノの習ってる子がいて、その子のピアノの発表会に行ったら、なんか、私もやりたいって言ったみたいで、それで体験入学に連れてって。うちの親が音楽の知識とかなかったから、ヤマハ音楽教室曰く、幼児科から入って、5、6歳になったらピアノコース、エレクトーンコースとかになりますよって説明そのまま真に受けて。〈略〉小学校入学して、やっぱりピアノがやりたかったんじゃないかな。幼児科の時に先生がお歌の伴奏とかでピアノを弾いてくれるじゃない。それを見るたびに影響されたんだと思う。エレクトーンはなかった。やっぱりピアノは当然かなって。

ここでは、井上静香は幼稚園の友達の発表会を見に行っ
てピアノに興

味をもったこと、彼女の母親が彼女を連れて行ったのは主にエレクトーンを用いた音楽教室の幼児科であったこと、小学校に入学して幼児科を修了したのをきっかけにピアノを選択したこと、が述べられている。彼女の場合、上記のように、4歳から通い始めた音楽教室では主にエレクトーンを使っており、したがって彼女がピアノを専ら習い始めたのは小学校に上がってからである。しかしその音楽教室の幼児科には、エレクトーンを習いたくて通い始めたのではなく、ピアノを習うつもりだったというニュアンスがうかがわれ、ピアノを習うにあたっての基礎的な訓練の場として位置づけられる。ゆえに彼女は幼児科が修了するとピアノコースの選択に躊躇がなかったのである。ピアノを習い始めた直接のきっかけは先行のエレクトーン教室での先生であるかもしれないが、そもそもの彼女に影響を与えた本人は幼稚園の友人であろう。いずれにしても、彼女は周囲の人々から影響を受けた自発関心型と考えられる。

3-2 兄弟先行型

阿部和子 A

私がピアノを習い始めたのは幼稚園の年長組でした。5歳ぐらだね。私には4歳年上の姉がいるんだけど、姉はその時小学校2、3年生で、その年代ってピアノを習い始める時期で、そういうのがご近所で流行ってました。それで私も一緒に行きたいって言って、お姉さんと一緒に始めました。〈略〉とにかくお姉ちゃんが行くから私も一緒に行きたいって言って付いていった気がするから、ピアノに対する憧れっていうよりも、お姉ちゃんが習うから私も習いたいっていう気持ちで始めたからね。

阿部和子は兄弟先行型で、姉の影響を受けたものである。この部分の最後に彼女も述べているように、ピアノ自体の魅力に関心を持ってレッスンを始めたわけではない。姉がレッスンを始めたのは近所の流行りであると述べられており、姉は自発関心型である。というのも、インタビューのその他の部分で、彼女は強調して、両親は「学校の勉強や他の習い事とか、そういうものに対して、両親が口を出すことはなくて、全く自分の自主性に任せられていた」と言うので、そのような両親が姉のピアノレッスンにだけ、いかに近所でそれが流行っていたとしても、習うように強制するとは考えにくいからである。

青木洋子 A

3つ年上のお姉ちゃんが、4歳の時からピアノを習って。はっきりとは覚えていないんだけど、母親に連れられてね、ちっちゃい頃から私もピアノの教室には行ってたと思うのね。たぶん私は小学校1年生の何月からレッスンに行ってると思う。〈略〉お母さんはもともと田舎の人で、東京に来て知らない土地でお姉ちゃんがすぐできて、子供に一所懸命気持ちを傾けていった人だから。ピアノを子供に習わせたいっていうのが、流行りっていうのもあったみたいけど、それはお母さんの夢だったみたい。子供がちっちゃい頃から英才教育っていうか、ピアノとか英語もお姉ちゃんに習わせたから。〈略〉対照的に私は放任主義で、全然手をかけなかったって言うてるから、かけなかったと思うけど。

青木洋子のケースは両親主動型に近い要素を持っている。というのは、この部分で彼女は、幼い頃から姉のピアノレッスンに連れられて行っていたこと、小学校1年生からレッスンを始めたこと、という彼女自身のことと共に、ピアノレッスンは母の夢であったこと、姉はその母に英才教育というものを受けたこと、を語っている。このことから彼女の姉は両親主動型と言えるだろう。しかしこの部分の最後で、彼女の母親が彼女に対しては放任主義であったことが語られており、彼女のピアノレッスンのきっかけは、姉が習っていたからという兄弟先行型になる。また彼女には弟もいるが、弟はピアノを習っていない。彼女は中学2年生になる前にレッスンをやめているが、28歳になってから、再びピアノレッスンを始めている。その理由は「1番目には、ピアノを弾いていると心地いいなって思う時が小学校の時にあった」ことと、「2番目にはね、ちっちゃい頃にやっていた基礎があるっていうのが自信になってた」ためだと彼女は語っている。

伊藤恵子 B

姉が近所のオルガン教室に通ってたのね。〈略〉私はそれこそまだ赤ちゃんだった時に、それに一緒に行ってたのね。〈略〉姉が小学校上がる前だったと思うけど、姉がいよいよピアノを買うって時に、ピアノ屋さんに行ったら、その時ちょうど私は2歳半だったんだけど、一番喜んだのが私だったんだって。〈略〉やっぱり姉が弾いてても、すぐ入ってきちゃ、どいてどいてやるから、それだったらちゃんと始めましようってことで始めたの。クラシック音楽に興味があった

のはお父さんだと思うけど、習わせたいっていうのはやっぱり母親の方が強かったかもしれない。

伊藤恵子は他の兄弟先行型の2ケースと異なり、自発関心型の人々の特徴も備え、導入期においてピアノに積極的な関心を示したことがうかがわれる。しかしそれが姉のオルガンレッスンを見ていた結果とも考えられ、やはり彼女のピアノレッスンのきっかけが姉のピアノレッスンに付随している兄弟先行型であることには変わりがない。また、彼女には妹がおり、妹も兄弟先行型として、のちにレッスンを始めている。それに関して、彼女は「母にしてみれば、小学校上がる前には妹にもピアノやらせたいっていうのもあったんだけど、ちょうどその時にうちの父親が職を変ったのね。経済的にも大変だったし、特に妹本人がやりたいって言わないことをいいことにやらせなかったって、あとで言ってた」と語っている。

3-3 両親主動型

浅井美代 A

ピアノは母親に連れられてやってて、知らないうちに、もう弾かされていた感じでした。3歳くらいの時でした。小さい頃は引越しが多かったので、その度にピアノの先生は代わりました。〈略〉母親に、将来ピアニストになるならもっと練習しなきゃダメよ、ピアニストになるなら音大行った方がいいわよって言われてたから。ピアニストになりたいって自分から言ったわけじゃない。

浅井美代はピアノを習い始めた頃の記憶がないほどの両親主動型で、彼女の母親は「ピアノが上手になって音大に進む」というのが希望だったと彼女は語っている。実際のところは、彼女は高校2年生で1年間海外へ留学しており、それをきっかけにピアノレッスンそのものをやめている。彼女はそれについてこう語っている。「音大に行くっていう気持ちが強かったとしたらアメリカは行ってなかったと思う」。また、彼女には妹がいるが、妹はピアノを習っていない。代わりに妹はヴァイオリンを習っていたことがあり、「才能教育やってて、母親がずいぶん熱入れてたから、その反動でなんかイヤになるのも早かった」という経緯がある。

秋山真紀 A

口コミで、たぶんなににさんが習ってるから真紀ちゃんも行ってみるっていう感じで、母親が情操教育の一環として始めたんだと思うんだけど。それまでにも3歳とか4歳の時に、リトミックとかお絵描きとか、いろいろ習わされて。そういうのがことごとく合わなくて。やっぱりさあ、子供って1回ぐらいでイヤだっていうか、ぐずったりするみたいで、自然にやめちゃった。で、ピアノに連れてつたらすぐく面白そうにやって、母親はこれなら続けられると思った節があるみたい。

ここで述べられているのは、秋山真紀は情操教育の一環としてピアノレッスンを始めたことである。彼女もピアノレッスンを面白そうにやっていたとあるが、初めから本人が望んだわけではなく、リトミックやお絵描きと同様にピアノにも母親に連れて行かれ、たまたま他のものとは異なってピアノには合っていたというニュアンスがあり、これは両親主動型と考えられる。彼女には妹がいるが、妹は彼女の影響を受けた兄弟先行型で、「当然私を聴いてれば自分もやりたいと思うことがあって、妹もピアノを始めた」というようにレッスンを始めたが、のちに「どうしても私が専門的っていうか、ちゃんとやってるから、私も母親も2人して、それは違うとか口出し」されてしまい、「それが苦痛でやめたみたい。すぐやめちゃった」という経路をたどっている。

飯島智美 B

3歳の誕生日にピアノを買ってもらって、それで、直ぐ始めた記憶はないんです。7月がお誕生日で、その次の4月からはヤマハの音楽教室に行ったので、それまでの間に、たぶんどこかで始めたんだと思います。ピアノを私がほしいと言ったのでは、絶対ないと思います。たぶん両親が私にやらせたかったから買い与えたんです。でも最初はそんな興味ももてなかったから、たぶんほっておいて。〈略〉クラシックは両親とも両方好きで。うちの母は私をピアノさせるつもりで産んだみたいですね。それこそ胎教みたいな感じで音楽を聴かせてみたいなんですけど。

飯島智美はインタビューの中でも最もスパルタ式にピアノレッスンを受けたケースである。彼女は「練習はホントに絶対暴力沙汰になるん

ですね。まだ絶対親の方が強いじゃないですか。それこそ、ここで逃げないと殺されちゃうかと思うぐらいに、ギャアギャアギャアギャア怒られる」ほどであったと語っている。上の部分で彼女が述べているように、彼女はピアノを入手して直ぐにピアノレッスンを始めたわけではない。彼女は手持ちの木琴で『ネコふんじゃった』を弾こうとしたが、両親に「木琴には黒鍵がないからできないって言われて、じゃあ私もピアノやるって言った」というのがピアノの先生に付ききっかけであったが、それは他の自発関心型のように、誰かがピアノを弾いているのを見て自分も弾きたくなったというよりも、やはり両親から、ピアノでしか『ネコふんじゃった』は弾くことができないと示唆されての導入であるので、両親主動型と判断した。

石野玲子 B

ピアノを始めたのは、たぶん4歳だと思います。私の行ってた幼稚園がアート系で、園長先生の主義だったと思うんだけど、美術と音楽関係、そういうののレッスンをアフタークラスでやって、そこに親が連れてったんだと思う。私はピアノとリトミックとバレエをやった。〈略〉うちの兄たちはね、やっぱり、ちっちゃい時だけピアノをやったのかな。それもやっぱり親に連れられてね。兄たちとは歳が離れてるから、詳しいことはわかんないけど、すぐやめちゃったって。男の子だし。うちの両親はね、2人とも音楽大好きで、子供にやらせようと思ったかどうかはわからないけど、家族みんなで歌ったり演奏したりできるような家庭を作りたいとは思ってたと思う。

石野玲子は両親主動型でピアノのレッスンを始めている。同様に幼稚園でピアノを習い始めた自発関心型の池内恵理が自ら望んだことを憶えていたのに対し、彼女は「そこに親が連れてったんだと思う」という不確定な表現ではあるが、自身のみならず、2人の兄たちも「やっぱり親に連れられて」と述べているので、両親主動型と判断した。彼女は小学校5年生の時から歌を習い始めているが、その時は「外で歌ってたのね。そしたらね、隣の隣に引っ越ししてきた人が声楽家だったのね。で、まあいい声ねって言ってきて、それで遊びで習うようになったの。親には習いたいって自分で言ったの」というように、自発関心型である。また、最後の、両親が「子供にやらせようと思ったかどうかはわ

からないけど」という部分の「やらせ」という表現は、ピアノを習わせるという意味ではなく、音楽を専門的に習わせて将来は音楽家にするという意味で、飯島智美の「うちの母は私をピアノさせるつもりで産んだみたいですね」の「させる」と同じだと思われる。なぜなら、彼女の両親は、兄弟3人にとりあえずピアノを習わせているし、彼女は高校から音楽学校に進学し、アメリカに音楽留学した後にオペラ歌手になっているからであり、この部分では、両親が最初から自分にそのような道を進ませようとしたことを否定しているにすぎない。

4. ピアノ趣味への入り口

以上のように、直接的なきっかけとして3類型を挙げてはみたが、その過程は混み入っており、本人が自発的に始めたケースであっても、それはもともと母親の望んでいたことであつたり、兄弟のうちで上の者は両親の希望でレッスンを受け、母親が練習にも立ち会ったが、下の者には無干渉だった、など様々である。けれど総じて、兄弟の中でピアノレッスンを受けた者がいれば、その女兄弟はピアノか他の楽器の手ほどきを受けているようである。これは、ピアノや他の楽器も含めた音楽におけるジェンダーを鑑みた上で、やはりその家庭の素養、つまり両親の音楽に対する寛容度に多くを負っていると考えざるを得ない。

また、前述したことであるが、この3つの類型が、そのままその後のコースを定めるものではない。たとえば、自発関心型であるから熱心に練習をする、兄弟先行型であるから直ぐにレッスンをやめる、両親主動型であるからピアニストになる、などということはない。ただ、彼女たちの練習に対する両親の干渉の頻度が高ければ高いだけ、彼女たちはBグループに近いところに進んでいくようである。本人のピアノを続けていこうとする意志と同様に、あるいはそれ以上に、両親のスタンスは重要なポイントである。当初から、女子のたしなみとしてピアノをやらせたい、あるいはピアニストを育てたいといった意図をもっている両親や、習うからには習慣的に練習をさせ、レッスンに通わせたいという両親や、練習には無関心という両親の姿がインタビューーを通して語られている。

今回引用した中で、複数のインタビューーたちも述べていたように、

多くの主観が、かつてピアノブームだった頃が存在し、自分たちはその渦中にいたと思っている。けれどそのブームは一過性だったものではない。平成8年度の東京都の「教育費調査」では、現在でもピアノレッスンがお稽古の1位を占めている。前述の「現代の若者と音楽」調査でも、現在の小学生の66.3%がピアノレッスンを受けており、これは現在の大学生と同数で、今でも高い人気を集めているようである。しかしその質は異なっているように思われる。この調査で注目すべき点は、男子のピアノ所有率が、大学生では7%、高校生では11%、中学生では35%、小学生では50%という一方向の伸びを見せていることである。もちろんそのピアノは母親のものかもしれないし、姉か妹のものかもしれないが、女子では同様に、61%、49%、75%、62%という順で、男子とは異なり、なんの脈絡もないように上下している。インタビューーのうちの1人で、現在は音楽科教諭の伊藤恵子は次のように語っている。「中学に入ってから、母が保護者説明会で、新入生の95%がピアノをやった経験があるっていうふうに聞いてき」たと。この数字は彼女が通っていた中学校が私立の女子校であったことから、ジェンダーや両親の経済状態とも関連があると思われる。もし彼女が公立中学に通っていたら、彼女の母親は保護者説明会でそのような数字を聞いてくることはなかったであろう。現在、なぜ男子のピアノ所有率が一定の割合で上がっているのかは不明であり、男子に対してインタビューーは行っていないので明言を避けるが、以前のピアノレッスンが持っていた良家の女子の習い事としての意味が薄くなっているのではないだろうか。つまり次のような仮説が考えられる。ピアノを続けていく上で両親のスタンスが強い影響を及ぼす以上、自発関心型の家庭外による相互作用、すなわち、みんながやっているから自分もやりたいという力と、家庭内相互作用ともいえる両親主動型や兄弟先行型では、構造的に後者の方が勝っており、その分、家庭外相互作用だけでは越えられないようなジェンダーギャップが、家庭内で姉と弟または兄と妹、母と息子という関係を通して狭められていくのではないだろうか。

今回のインタビューー全てが、現在でもピアノを聴くことあるいは弾くことが趣味である、というわけではない。Aグループの相原治子に至っては、インタビューー現在は「あまりクラシックを聴こうとか、聴きたいとかいう欲求がないんですね」と語っている。「でも一時期、高校生

の時3ヵ月ぐらいなんですけど、サティがすごい好きで、なんか自分で譜面を買ってきて弾いたりはしました」という経験をし、「将来自分に時間が持てたり、子供ができたりとかしたら弾いてあげたいなと思うし、たぶん弾くと思うんですよ」という気持ちだけは持っている。この論文のはじめで定めた定義に従うと、過去のそのような経験と未来へ寄せる意気込みだけではそれを趣味とは言えない。しかし彼女の性向はピアノをネガティブに捉えるものではなく、様々な経緯を経た幼少期のピアノレッスンが、ひいてはレッスンのきっかけが、彼女のピアノ趣味の可能性を定める一要因として働くことは明らかであるだろう。

【注】

- 1) 大宮眞琴 1994『ピアノの歴史 楽器の変遷と音楽家のはなし』音楽之友社 223頁
- 2) 大宮眞琴 前掲書 211頁
- 3) 日本楽器製造株式会社設立者。1856年生まれ。
- 4) 大正期から昭和初期にかけての日本の文学作品に、良家の女子のたしなみのシンボルとしての琴の役割をうかがい知ることができる。たとえば、以下の3作品である。

a. こころ 夏目漱石 大正3年(1914)

私は移った日に、其室の床に活けられた花と、其横に立て懸けられた琴を見ました。何方も私の気に入りませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜む父の傍で育ったので、唐めいた趣味を子供のうちから有っていました。その為でもありませんか、こういう艶めかしい装飾を何時の間にか軽蔑する癖が付いていたのです。〈略〉其の花は又規則正しくしおれる頃になると活け更えられるのです。琴も度々鍵の手に折れ曲がった筋違いの室に運び込まれるのです。私は自分の居間で机の上に頬杖を突きながら、其琴の音を聞いていました。私には其琴が上手なのか下手なのか能く解らないのです。けれども余り込み入った手を弾かない所を見ると、上手なのじゃなかろうと考えました。まあ活花の程度位なものだろーうと思いました。

b. 友情 武者小路実篤 大正9年(1920)

彼にも一人の妹がいて、今は夫と一緒に外国に行っていた。今年二十一になる。彼は妹が齢ごろになってから、いろーの男の人が妹に近づこうとしたのを思い出した。妹はそう美しい女に思えなかった。し

かしそれでも妹の処にいろ—機嫌をとりにくる者のあるのを感じた。妹が琴をならいに行っていた。其処に尺八をならいに行っていた男が時々来たことがあった。彼はその男を嫌って、其の図々しさを心配した。そして妹が笑いながら呑気にその男と話すのを見ると、ある不安さえもった。しかし妹もその男を軽蔑していることを知って安心した。

c. 春琴抄 谷崎潤一郎 昭和8年(1933)

お師匠さま(春琴のこと)は舞いがお上手だったそうでございますが琴や三味線も五つ六つの時分から春松という検校さんに手ほどきをしてお貰いなされそれからずっと稽古を励んでおられました。それ故盲目になってから始めて音曲を習われたのではないのでございます。よいお内の娘さんは皆早くから遊芸のけいこをなさりますのがその頃の習慣でございました。

- 5) 全国のピアノ生産台数のうち、日本楽器製造株式会社が65%、河合楽器製作所が33%、その他の企業が2%を占めている。(楽器製造協会調べ)
- 6) 専門技術的教育を受けた人々とは、音楽大学あるいは音楽大学付属高校の音楽科で学んだ者とする。
- 7) 以下のインタビューの名前の後についているA、Bの表記は、このグループを示すものである。
- 8) インフォームドコンセントには、匿名性の条件と、録音テープの研究以外の使用の禁止と、自由意志によるインタビュー参加と、研究結果の報告(希望による)が含まれている。
- 9) ピアノのレッスンを受けていた年数を「ピアノレッスン歴」とした。Bグループの人々の場合、1998年現在でもレッスンを受けているならば、それも含んでいる。具体的なレッスン歴は次の通り。()内は始めた当時の年齢と西暦。

A・14年(3歳 1971年)	B・26年(4歳 1972年)
A・14年(4歳 1973年)	B・24年(4歳 1972年)
A・10年(5歳 1974年)	B・27年(3歳 1971年)
A・7年(7歳 1975年)	B・18年(2歳 1970年)
A・4年(9歳 1977年)	B・11年(4歳 1970年)
A・7年(7歳 1977年)	B・19年(6歳 1977年)
- 10) 以下のゴシック部分と、その下の説明の中の「」内はインタビューの語った発話を編集したものである。また、その部分に含まれたイン

タビュアーの発話は省略してある。省略していないトランスクリプトは、たとえば、次のようなものである。これは本文に抜粋した秋山真紀のインタビューで、インタビュー開始直後の会話である。前の部分では、インタビューアーは、ピアノレッスンを始めた歳と、当時の先生を決定した経緯を尋ねている。

凡例) 4桁数字=発話番号 S=インタビューアー M=インタビューイー

|| =発話が前の発話に重なっていることを示す

↑ =語尾が上がっていることを示す

××=インタビューイーの本名

0035 S || 広告とか出してたの、それ、近所に

0036 M それはね、口コミ、で

0037 S || あ銀行とかじゃなくて

0038 M うん、じゃなくて

0039 S || その

0040 M うん、たぶん

0041 S || あの

0042 M なになにさんが習ってるから

0043 S うん

0044 M ××ちゃんも行ってみる↑という感じ

0045 S || あ幼稚園筋みたいな感じ↑

0046 M || うん

0047 S うんうんうん

0048 M それで、母親が

0049 S うん

0050 M 情操教育の一環

0051 S || うんうんうん

0052 M || として、始めたんだと思うんだけど

0053 S || あ、でさ、あ

0054 M うん

0055 S その当時には

0056 M うん

0057 S その情操教育の一環として始めたのは

0058 M || うん

0059 S だから、私があるのー

- 0060 M || うんうん
0061 S 途中でいろんなものを習ってやめたように
0062 M || うん
0063 S || 別に
0064 M うん
0065 S 音大とかそういうことは全く
0066 M || うん。始めは
0067 S || うん
0068 M || 全然なかった。それまでもリトミックとか
0069 S || うん
0070 M いろいろ習わされてて
0071 S あ、そう。えそれは3歳ぐらいの時から↑
0072 M うん。3歳とか4歳の時に
0073 S || え、リトミック習ってたの↑
0074 M うん
0075 S なんかそれにしちゃあんまりリズム感 (笑い)
0076 M そうなのよ (不明)
0077 S || なんかノリノリの××とかないよね
0078 M || うん
0079 S あんまりこんなんなって踊っちゃうとかないよね
0080 M || うん。だからそういうのが
0081 S うん
0082 M ことごとく合わなくて
0083 S う (笑い)
0084 M で
0085 S || えじゃあほかりトミック以外何やってたの
0086 M お絵描きとか
0087 S ああああああ
0088 M || うん
0089 S やったんだ。で、合わなくて、そのピアノ
0090 M || うん
0091 S || 習うまでにやめちゃったの？
0092 M うん。自ぜーん、なんか、やっぱりさあ
0093 S うん
0094 M 子供って、そんな、いつ1回ぐらいで

- 0095 S うん
 0096 M あのー、やイヤだっていうか
 0097 S うん
 0098 M あのぐずったりするみたいで
 0099 S || ああああ
 0100 M || うん。でピアノに連れてった
 0101 S || うんうんうん
 0102 M || すごく、面白そうにやあって
 0103 S || あそうなんだ
 0104 M これなら続けられる
 0105 S || うんうんうん
 0106 M って思った、筋があるみたい

参考文献

- Adorno, T. W. 1962 Einleitung in die Musiksoziologie 渡辺健・高辻知義訳
 1970 『音楽社会学序説』音楽之友社
 ———— Dissonanzen, Musik in der verwalteten Welt 三光長治・高辻知義訳
 1998 『不協和音 管理会社における音楽』平凡社
 赤井励 1995 『オルガンの文化史』青弓社
 Bourdieu, P. 1979 la distinction, critique sociale du jugement 石井洋二郎訳
 1990 『ディスタンクシオン 社会的判断力批判』藤原書店
 ———— 1992 les regles de l'art, genèse et structure du champ littéraire 石
 井洋二郎訳 1995 『芸術の規則』藤原書店
 Cavaye, R・西山志風 1987 『日本人の音楽教育』新潮社
 Cook, N. 1990 Music, Imagination, and Culture 足立美比古訳 1992 『音楽・想
 像・文化』春秋社
 現代の若者と音楽研究会 1995 「現代の若者と音楽 若者における音楽行動
 の基礎的実態調査」調査報告
 Gronow, J. 1997 THE SOCIOLOGY OF TASTE, Routledge
 Longhurst, B. 1995 POPULAR MUSIC AND SOCIETY, Polity Press
 Lynes, R. 1980 THE TASTEMAKERS, Dover Publication, Inc.
 宮島喬 1994 『文化的再生産の社会学 プルデュール理論からの展開』藤原書
 店
 武者小路実篤 1985 「お目出たき人・友情」『日本の文学25』ほるぷ出版
 夏目漱石 1985 「こころ」『日本の文学27』ほるぷ出版

- 西原稔 1995 『ピアノの誕生 楽器の向こうに「近代」が見える』 講談社
- Neuman, W. L. 1991 *Social Research Methods, Qualitative and Quantitative Approaches*, Allyn and Bacon
- 小川博司 1993 『メディア時代の音楽と社会』 音楽之友社
- 大宮真琴 1994 『ピアノの歴史 楽器の変遷と音楽家のはなし』 音楽之友社
- 谷崎潤一郎 1985 「春琴抄」『日本の文学59』ほるぷ出版
- Waber, M. 1924 *Die rationalen und soziologischen Grundlagen der Musik* 山根銀
二訳 1954 『音楽社會學』 有斐閣
- 神野由紀 1994 『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』 勁草書房